

S 中 J 先生のあたりまえ

その① 「生活とつながる美術」

わたしたちは、身の回りにあるものが自分に近い存在であればあるほど、その価値を考えたり見付けたりすることをしなくなります。身近な「日用品」を比較鑑賞することで、「高価なものは大切に扱う、安価なものはそれなりに」とは違う価値観を見付け、生活の中の「用と美」を楽しみ、人生に彩りを添えていってほしいと願い授業に取り組んでいます。(写真右、ワークシート)

「仏像鑑賞」の授業では、それぞれの国でそれぞれの祈りの象徴とされるものがある中から仏像にスポットを当て、その意味のみならず彫刻作品としての見方も培います。私自身が何の知識もなかった高校時代、修学旅行で寺社仏閣を見学し「つまらない」と思ったことを大人になってから後悔したことも原動力となっています。(写真左、授業風景)

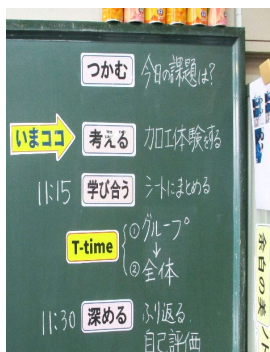
どちらの鑑賞題材も、子どもたちは「目からうろこ」を楽しみながら大いに盛り上がります。「家にもある!」「そんな風に思ってもなかった」「お寺に行った時見てみよう」などと。そして生活の中にあるものたちを改めて味わい、授業が終わる時にはそれらに自分なりの「価値観」を見出している様子うかがえます。知識と経験が結び付いたとき、生活がより豊かになると思います。



その② 「金属素材は難しくない」

数ある表現材料のうち、「金属」は教える側からするととっつきにくい素材であると感じていました。しかし、自分で題材開発しているうちに「おもしろい」と思うようになり、「銅」を立体作品の主材料に使っています。技術科で「ハンダごて」の使い方を学習した後にその題材を設定しています。使ったことのない材料「銅板」の特徴を探る「お試し時間」を設定し、子どもたちが「こんなこともできるんだ」、「これは無理か」と理解してから作品のアイデアを練ります。直火に銅板をかざすと、焼きなまされて柔らかくなったり、思いもよらぬ美しい色に変化したりするなど、歓声が上がります。

扱いが難しい、やったことがない、生徒にはちょっと無理、と金属素材を避けてしまいましたが、意外と扱いやすく、そして何より子どもたちの経験と表現の幅が広がります。



鍛金、へら押し、いぶし…銅板の得意なこと不得意なことを見付け教え合います。初めての素材でも少し安心感をもった制作。ロボットや植物など、味わいある作品が子どもたちの手から生まれます。

